

美しきアメリカ

—歴史家の哀しみ、作家の決意—

山路 雅也

序

スコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald) は自身のアメリカ観を『ノートブック』に次の様に記している。

私はアメリカの歴史をじっくりと眺めてみる——すると私にはそれが世界で最も美しい歴史に思えるのだ。それは私と私の国民の歴史だ。そして仮に私がシーラのように昨日この国へやって来たとしても、その様に考えるだろう。それはあらゆる大志の歴史だ——それはアメリカの夢にとどまらず、人類の夢であり、もし私がこの歴史の末端に身を置いたとしても、やはり開拓者たちの行列に加わっているであろう。
(190)

引用の「シーラ」とはフィッツジェラルドの落魄の晩年を支えた女性シーラ・グレーム (Sheilah Graham) を指している。当時の彼はアルコール中毒という宿病と創作力の枯渇に喘ぎ苦しんでいた。その経済的状況は困窮の極みにあったという。しかもハリウッドを舞台にした意欲作『最期の大君 (*The Last Tycoon*)』(1945) の執筆に渾身の力を注ぐも、程なく作家は志なかばでこの世を去ってしまう。こうした言わば尾羽打ち枯らしたフィッツジェラルドが最晩年に到達した境地が、引用の自国アメリカに寄せる想いなのだ。

作家はアメリカの歴史を「世界で最も美しい」と称えている。晩年の作家の眼にそれはなぜそれ程までに美しく映って止まなかったのか。美しきアメリカ——本稿では「罪の赦し (“Absolution”）」(1924) を足掛かりに、歴史家フレデリック・ジャクソン・ターナー (Frederick Jackson Turner) のフロンティア理論及びイギリス・ロマン派詩人ジョン・キーツ (John Keats) の芸術的信条をも視野に入れつつ、作家が最期に辿り着いたこのア

メリカ観の具体像を探ってゆきたい。

Ⅰ 嘘という真実

「罪の赦し」は主人公ルドルフ・ミラー (Rudolph Miller) 少年が直面する信仰生活の危機を扱った小品だ。その危機の根幹には少年の罪悪感がある。ルドルフは自分は未だかつて嘘をついたことがないとの嘘を、告解の場でシュウォーツ神父 (Father Schwartz) につくと、あろうことかそれを悔い改めぬまま聖餐を受けてしまう。主人公はそのことに怯え罪悪感を抱くが、作品はこの嘘をめぐる罪悪感の変容を記録する。

彼の嘘は告解の場だけにとどまらない。彼は貧しい両親を否定しその出自をでっち上げたかと思えば、告解での嘘の翌日の聖餐を回避すべく、水を飲んでしまったので聖餐式には行けないとの嘘を企んだりもする。「習慣的そして本能的に嘘をつく」(281) ルドルフとは嘘の囚われ人なのだ。最終節、そんなルドルフがいよいよ神の前に引き摺り出されると、彼の罪悪感は一変する。己の嘘を洗い浚い告白し怯える主人公にシュウォーツ神父は、「君はまるで物事が光り輝いている様な顔をしているな」(288) と語りかけるのだ。この嘘の囚われ人を「光り輝いている様な (glimmering)」と形容することで神父は、嘘から罪深きものという表層を剥ぎ取り、その深層へとルドルフをいざなっていく。

しかし恐怖を感じながらも彼 [ルドルフ] は、内なる確信が固まるのを感じていた。神とは一切関係の無い、言語に絶する程に華麗な何かはどこかに存在したのだ。神はもはや原罪的な嘘のことで自分のことを怒ってはいないと彼は考えた。なぜなら神は、ルドルフが告解の場で物事をもっとすばらしく見せる為に嘘をつき、輝かしく誇り高いことを述べることで、陰気な告白に彩りを添えていたことを理解してくれたに違いないからだ。(289)

ここに「神や両親に代表される公的な現実と空想の世界との主従関係が逆転する決定的瞬間」(森 36) が訪れる。「罪の赦し」において嘘とは、神の御墨付まで与えられた「言語に絶する程に華麗な何か (something

ineffably gorgeous)」であり、「輝かしく誇り高いこと (a thing radiant and proud)」なのだ。ルドルフの罪悪感は、嘘という「内なる秘密こそが彼自身であり、それ以外のものは一切が飾り立てられたうわべやご都合主義の旗印に過ぎない」(286) 意という「内なる確信」へと変容する。嘘という空想の世界はもはや何のためらいも無く真実と固く結び付くと燦然とする。そして嘘の囚われ人ルドルフは「真実を創造する為に嘘をつくストーリーテラー (the storyteller who lies in order to create truth)」(Malin 213) として、その煌めきの内に遊ぶことを「赦され」るのだ。

II アメリカという嘘

嘘が「輝かしく誇り高い」真実である為には、しかし、満たされなければならぬ条件がある。それにはリアリティーの忌避が求められるのだ。シュウォーツ神父はルドルフを諭す為、その喩えとして遊園地を引き合いに出す。神父は「夜にそこに出かけて、少し離れた暗い所に佇んでごらん——暗い木陰にね。……どこかで楽隊が演奏しているし、ピーナッツの匂いもする——すると全てが煌めきだすのさ」(289) と語る。遊園地という作り物の世界、すなわち大掛かりな嘘の世界が「煌めきだす(twinkle)」には、「離れ」ていてしかも「暗い」という、リアリティーを忌避する状況がどうしても必要なのだ。だから神父は鬼気迫る様子で少年に念を押さずにはいられない。

「だが近付いてはいけない。……なぜならもし近付けば、熱と汗と生命を感じるだけだからだ」。(289)

「熱と汗と生命」の感知を頑なに拒むこの教えをJames R. Mellowは、「リアリティーとは距離を置く必要性 (the need to distance oneself from reality)」を迫る「恐ろしい教訓」と捉えている(Mellow 198)。

作者自身が手紙で明かしている通り「罪の赦し」は当初、『偉大なるギャツビー (*The Great Gatsby*)』(1925)のプロローグとなる予定であった(Letters 164)。『ギャツビー』は黎明期アメリカの描写をもって終わる。その描写が崇高なまでの美を横溢させつつ作品のエピローグとして「罪の

赦し」に呼応すると、両者の有機的繋がりはいやが上にも際立つことになるろう。

語り手のニック・キャラウェイ (Nick Carraway) は清秋の月夜の下、今は亡き主人公ジェイ・ギャツビー (Jay Gatsby) の邸宅を訪れる。彼は月影に濡れるギャツビー邸よりロング・アイランドの暗い海を挟んで対岸を遠望する。ニックもまた「リアリティーとは距離を置く」べく、陽光が辺りを隈なく照らす昼のリアリスティックな世界に背を向け、空想を慈養する夜の闇に身を委ねつつ遙か対岸に目を遣るのだ。こうして彼は「離れ」ていてしかも「暗い」という、「罪の赦し」の遊園地の譬えと同じ状況を成立させ、シュウォーツ神父の「恐ろしい教訓」に忠実であろうとする。すると彼もまた嘘をつくのだ。ニックは「かつてオランダの船乗りたちの目の前で花開いたこの島の昔の姿——新世界の瑞々しい緑の胸」(Gatsby 140) を時空を越え幻視して憚らない。ここにアメリカという大いなる嘘がつかれることになる。

嘘という空想の世界は「罪の赦し」においてリアリティーが忌避されると、虚妄と現実の隙間をかいぐり真実と結び付いた。そしてそれはもはや少年の内的世界を充足するだけでは飽き足らず、『ギャツビー』において驚異的な成育を示すと、アメリカそのものをも生成してしまうのだ。

III 歴史家の哀しみ、時代の哀しみ

「罪の赦し」で嘘が真実と結び付き、『ギャツビー』でアメリカという嘘がつかれたのとはほぼ時を同じくして、ある特異な裁判が全米の注目を集めることになる。それはテネシー州の高校で進化論を教えたことを違法とする州法を巡るもので、担当教員の名にちなみ「スコープス裁判 (Scopes Trial)」と呼ばれる¹。ファンダメンタリストと教員が攻防戦を繰り広げたこの別名「サル裁判 (Monkey Trial)」において人々は、科学的思考が何の臆面もなく宗教という聖域に肉薄する様を固唾を呑んで見守った。

ジャズ・エイジの年代記『オンリー・イエスタデイ (Only Yesterday)』(1931)を記したフレデリック・ルイス・アレン (Frederick Lewis Allen) も指摘する通り、1920年代に科学偏重の傾向はその極点を迎えている。当時は「アルバート・アインシュタインの新たな学説が新聞の第一面を飾り」、

人々は「科学的情報や理論の洪水にどっぷりと浸っていた」。「科学という言葉が今や合い言葉となり、「証明された事実を信頼するという科学的習慣」が時代の趨勢となっていた (Allen 148-151)。こうした強大な威光の下、科学は遍く全てを照らし出そうとした挙句、「スコープス裁判」なる騒動を引き起こす。

そうした折、歴史家フレデリック・ジャクソン・ターナーの所謂フロンティア理論が、専門家のみならず一般の人々の間で広く受け入れられたことに注目したい。1920年の論文集『アメリカ史におけるフロンティア (*The Frontier in American History*)』公刊後、彼の理論は野火の如く広がることになる。科学とテクノロジーを偏重し繁栄を謳歌する当時の社会で、なぜ、この歴史家の理論が流布し「ターナー派」と呼ばれる一大学派が形成されるに至ったのか。その要因として様々なことが挙げられようが²、何よりも主因として捉えられるべきは、その理論の背後に見え隠れする歴史家の哀しみであろう。当時の社会がそれに同調したからこそ、彼のフロンティア理論は広く受け入れられたのである。

ターナーが論文「アメリカ史におけるフロンティアの意義 (“Significance of the Frontier in American History”）」(1893)の発表によりその名を轟かせたのは周知の通りだ。ターナーはそれを1893年のアメリカ歴史学協会のシカゴ大会で発表している。この学会は同年のシカゴ万国博覧会に合わせて計画され、博覧会にはあのヘンリー・アダムズ (Henry Adams) が目を見張ったダイナモを始め、最先端のテクノロジーの粋を集めたものが所狭しと陳列された。時は19世紀後半の革新主義の時代、David W. Nobleによると、1880年代にはアメリカ社会の専門化が進み、そうした動向の内に歴史家という職業も確立されるが、「1880, 1890年代の新たな専門家たちが唯一拠り所としたものは、『科学的方法論 (scientific method)』を手段として用いる人間の理性であった」(Noble 18)。ターナーとは、1920年代に顕在化する科学偏重傾向の胎動の内に慈しみ育まれた専門家であり、「テクノロジーの見本市」(大井 7) に沸くシカゴという檜舞台で大いなる一步を踏み出した歴史家なのだ。

それゆえターナーは1890年の国勢調査報告書の一文を、それがフロンティア消失という過酷な現実を突き付けようとも、敢えてその論文の冒頭に掲げねばならなかった。なぜなら国勢調査は、土地面積やその位置関係を計測し「数量という抽象化された指標によって社会の内部を隈なく把握し

てゆく」(若林 104) 測量という科学的行為に基づくからだ。1920年代の「証明された事実を信頼するという科学的習慣」を先取りするターナーは、「科学的方法論」を尊重しないわけにはゆかない³。

ターナーの理論において「未開と文明の接点」であるフロンティアは「絶え間なく前進」し、その限りにおいて「フロンティア線上における原始状態への復帰、およびその地域における発展」は途絶えることはなかった。「アメリカの社会的発展は、フロンティアにおいて絶え間なくその開始を繰り返す」得たのであり、ターナーはフロンティアがもたらすこの「不断の再生 (perennial rebirth)」を、「我々の歴史における真にアメリカ的な部分 (the really American part of our history)」と呼ぶ (“Significance” 32-34)。開拓者たちを西部へ、そして数多の移民をアメリカへいざなって止まぬのは、「単に、ぼんやりとした盲目的な物質主義」では決してなく、アメリカという「よりすぐれた社会を建設するための人間の苦闘の物語」を際限なく綴り得る、フロンティアという「美しい白紙のページ」なのだとして歴史家は訴える (“Contributions” 110-113)。

国勢調査報告書に忠実であるならば、「苦闘の物語」を際限なく紡ぎ出した「美しい白紙のページ」は破り取られ、「不断の再生」はもはや叶わない。ターナーが全幅の信頼を寄せる「科学的方法論」は、歴史家とアメリカから「真にアメリカ的な部分」を容赦なく奪い取ろうとする。しかし「1890年代の新たな専門家」である以上、「アメリカという一国家の未来が、ターナーにとって完全なるエントロピーとな」ろうとも (Noble 22)、彼は「証明された事実を信頼」し、それをありのまま受容する他ない。こうして彼はシカゴで壇上に上がると、新進気鋭の歴史家の地位の獲得と引き換えに「真にアメリカ的な部分」を喪失する。「フロンティアは過ぎ去り、それに伴いアメリカ史の最初の時代も終焉を迎えた」 (“Significance” 60) と結ばれるこの論文は、歴史家が自身とアメリカのために奏でる哀歌に他ならない。

1920年代アメリカ社会は、そんなターナーの理論の背後に見え隠れする彼の哀しみに同調する。それはフィッツジェラルドのエッセイ「我が失われし街 (“My Lost City”）」(1945)に記録される。

そして最後にあの時代に関して言えば、私はある午後、薄紫色とバラ色の空の下、高層ビル群の中をタクシーに乗っていた時のことをふ

と思います。私は泣き叫んでいた。なぜなら自分が欲しいものを全て手に入れてしまっていて、もうこれ以上は幸せになれないことが分かっていたからだ。(26)

Richard Lehan は『ギャツビー』におけるフロンティア理論の反映を指摘し、この作家が「フレデリック・ジャクソン・ターナーの学説を十分に心得ていたことは、明らかである」(Lehan 30)と声明している⁴。「欲しいものを全て手に入れてしま」った作家はこの時、それが「ぼんやりとした盲目的な物質主義」の充足に過ぎぬという歴史家の声を聞き、「真にアメリカ的な部分」を摩天楼の狭間に探し求めたに違いない。だがその喪失はフロンティア消失という科学的に「証明された事実」に基づくものであり、それを拒否することは時代が断じて許さない。今や科学偏重の傾向はターナーの時代にも増して著しく、「スコープス裁判」なる騒ぎまで引き起こしている。作家は「もうこれ以上幸せになれない」という想いに支配され、己の諦観と歴史家が陥ったエントロピー的状况を重ね合わせ慄然とする。そして彼は思わず「アメリカ人の生活に第二幕はない」(29)とエッセイに記すのだ。これが、「フロンティアは過ぎ去り、それと共にアメリカ史の最初の時代も終焉を迎えた」という歴史家の言葉に呼応することは言うまでもなからう。こうしてフィッツジェラルドは歴史家の哀しみを想い、それに深く同調し涙する。ジャズ・エイジと一体化しそれを活写することで「時代の申し子」(24)となったこの作家の哀しみは、時代のそれに他ならない。1920年代アメリカ社会はターナーと哀しみを共有していたのだ。

IV 作家の決意

このように1920年代アメリカ社会は、科学が照らし出した過酷な現実を前にもはやなす術もない歴史家に同調すると、共にエントロピーの暗い淵に沈んでゆく。だがそうした只中であってフィッツジェラルドは、そこから浮かび上がろうとする。彼は「不断の再生」という「真にアメリカ的な部分」を再び手に入れ、「アメリカ人の生活」の「第二幕」を開示しようとするのだ。我々はその痕跡を「罪の赦し」に認めることが出来る。

先に触れた通りルドルフは、水を飲んだので聖餐式には行けないとの嘘

を企てる。彼はわざわざ使ってもいないコップを流しに置こうとしたところを父親に見咎められ、散々に殴打された挙句、企ても未遂に終わる。ここで作家は「想像力の誠実さ (the honesty of his imagination) が彼を裏切った」(284) と記すのだ。ルドルフにコップを置かせたのは、嘘という空想の世界に忠実であろうとする、彼の切なる願いに違いない。少年は「想像力の誠実さ」に後押しされたからこそ、発覚の危険に憶することなく、コップを置くことが出来たのだ。懸念通りルドルフは激しい殴打に見舞われるが、「想像力の誠実さ」とは、過酷な現実をものともせず、ただひたすら嘘という空想の世界に没入する少年の信条に他ならない。そしてそれは「リアリティーとは距離を置く必要性」を迫る、先述のシュウォーツ神父の「恐ろしい教訓」と通底しよう。

森慎一郎も指摘する通り、フィッツジェラルドはこの「想像力の誠実さ」という言葉を、「罪の赦し」の発表から十年後の1934年、モダンライブラリー版『ギャツビー』の序文で再度用いている (森 35)。作家は『ギャツビー』執筆時を回想し、「しかし私の知る限り、真実に背いたという罪悪感はない。真実とは、正確に言えば真実に相当する何か、すなわち想像力の誠実さへの試み (attempt at honesty of imagination) のことだ」(Gatsby 224) と述べている。十年を経てもなおその胸に宿り続けた「想像力の誠実さ」とは、作家本人の信条でもあったのだ。

フィッツジェラルドがルドルフと共有するこの信条の出処を辿れば、作家が敬愛して止まなかった詩人ジョン・キーツの芸術的信条に辿り着く。詩人は1817年11月22日付の手紙で、その余りに有名な芸術的信条を披瀝する。我々はそこに、この詩人に対する作家のただならぬ傾倒ぶりを確認しよう。

私は心情の力の神聖さと想像力の真実さ(the truth of imagination) 以外には、何も確信が持てない——想像力が美として捉えたものこそが真実であるに違いない——それが目の前に存在していてもいなくても……。 (Keats 36)。

現実とは距離を置き「想像力の真実さ」のみを慈しむ詩人と、「想像力の誠実さ」を信条とするルドルフやフィッツジェラルドの間に、一体どれ程の差を見出だし得よう。それゆえ少年と作家は、「想像力が美として捉え

たものこそが真実であるに違いない」とする詩人に追随する。ルドルフはシュウォーツ神父の「恐ろしい教訓」通り、現実をもものともせず空想の世界に没入すると、その一見たわいない嘘を「言語に絶する程に華麗」で「輝かしく誇り高いこと」に昇華し、真実と結び付ける。フィッツジェラドもまた然りである。本稿の冒頭で触れた通り、彼はアメリカの歴史を「世界で最も美しい」と称えている。ルドルフがシュウォーツ神父に導かれたように、作家はキーツの導きを頼りに美しきアメリカという「真実」を手に入れるのだ。フィッツジェラドにとって「想像力の誠実さ」とは、単なる創作上の信条にとどまらない。それは美しきアメリカという「真実」、すなわち「真にアメリカ的部分」を再び獲得し「アメリカ人の生活」の「第二幕」を開示するための決意表明でもあるのだ。

V 美しきアメリカ

キーツの芸術的信条は「ギリシア古甕に寄せるオード ("Ode on a Grecian Urn")」(1819)に結晶する。第二連ではその甘美さにおいて、「聞こえる調べ」が「聞こえない調べ」に屈し、現実に対する想像力の優位が保障される。それを受け最終の第五連では、古甕が自ら「美は真なり、真は美なり」と語り、詩人の唱える真と美の関係を彷彿とさせる。1940年8月3日付の愛娘への手紙でフィッツジェラドはこのオードに言及すると、「ともかく素晴らしい」と手放して絶賛し、「おそらくもう百回は読んだと思う」と書いている (*Letters* 88)。ここにフィッツジェラドのアメリカ観、美しきアメリカがその具体像を現すことになろう。

フィッツジェラドは詩人の芸術的信条に追随すべく、それが具象化される古甕の世界に分け入る。Adam Roberts が指摘する通り、環状体というその形態ゆえに古甕の上では「いかなる模様も、途切れることなく連続的であり、明確な起点もなければ、明確な終点もない」(Roberts 34)。作家は古甕の上に刻まれる人々の「途切れることなく連続的 (contiguous)」な行列に加わると、実際は接吻出来ずともその愛が永遠に祝福される恋人たちや、実際に音は聞こえずとも永遠に奏で続ける楽士たちと相見える。現実が度外視され甘美な空想が真実と直結するこの世界に目を見張った作家は、それと対照的に過酷な現実の重石を付けられエントロピーの淵に沈

むアメリカを憂えたに違いない。そこで彼は「想像力の誠実さ」に後押しされると、アメリカの見直しを図る。作家はその行列に開拓者たちをも加え、「想像力が美として捉えた」古嚮の世界への追隨に専心するのだ。ここに現出するのが他ならぬフィッツジェラルドのアメリカ観、美しきアメリカなのである。先に見た『ギャツビー』における嘘によるアメリカの生成とは、開拓者たちに先行した「オランダの船乗りたち」を動員してのその実践に他ならない。

作家は開拓者たちをこの行列に加えることで、その「途切れることなく連続的」な歩みを保障する。これにより彼はフロンティア消失という現実をもとのもせず、かつて「フロンティア時代が生み出した社会観念や理想と抱負」(“Contributions”96)にひたすら思いを馳せその慈養に専心し、アメリカ社会の発展へのその永続的な寄与の可能性を示唆する。こうして「不断の再生」という「真にアメリカ的な部分」は再び獲得され、美しく燦然とすると、「それが目の前に存在していてもいなくても」紛れもない「真実」となるのだ。ここに「アメリカ人の生活」の「第二幕」が開示され、エントロピーの淵に沈む歴史家とアメリカ社会の哀しみは、この美しきアメリカにおいて溶解するのである。

おわりに

フィッツジェラルドがそのアメリカ観を表明したのは、先述の通り幸福とはほど遠い晩年においてであった。精神を病み入院中の妻への自責の念、その治療費や愛娘の教育費といった経済的問題、ハリウッドでのシナリオ執筆という不向きな仕事、アルコール中毒に起因する創作力の低下など過酷な現実には執拗に作家を苦しめ続けた。しかしそうした晩年であったからこそ、彼はキーツさながらに現実とは距離を置き、「想像力の誠実さ」に一層忠実になり得たのであろう。アメリカン・ドリームの具現者である筈の彼が「真にアメリカ的な部分」を獲得したのが、キャリアの絶頂期のジャズ・エイジではなく落魄の晩年であったことは、皮肉と言わざるを得ない。

[注]

- 1 「スコープス裁判」は、『ギャツビー』の出版と同年の1925年に行われた。その詳細に関してはAllen(148-156)を参照。
- 2 ターナーがその理論を補足拡充すべく学術専門誌のみならず一般向けの教養雑誌に発表したこと、彼の教えを受けた若き歴史家たちが全米の大学でその理論を広めたことなどもその要因として考えられる（渡邊 231-232）。
- 3 ターナーがその理論形成にあたり最も影響を受けたものに十年毎に行われるアメリカ国勢調査とその報告書が挙げられる（渡邊 236）。
- 4 Rehan(42-51)を参照。

引用文献

- Allen, Frederick Lewis. *Only Yesterday: an informal history of the 1920's*. New York : John Wiley & Sons, Inc.,1997.
- Bloom, Harold., ed.*John Keats*. Broomall : Chelsea House Publishers, 2001.
- Bryer, Jackson R.,ed. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*. Madison: U of Wisconsin P, 1982.
- Fitzgerald, F. Scott. "Absolution". *The Short Stories of F Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York:Simon & Schuster, 1989.
- . *The Great Gatsby*. Ed. Bruccoli. Cambridge : Cambridge UP, 1991.
- . *The Letters of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Andrew Turnbull. New York: Scribners, 1963.
- . "My Lost City." *The Crack-Up with other Pieces and Stories*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1986.
- . *The Notebooks of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Bruccoli. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1972.
- Keats, John. *John Keats The Major Works*. Ed. Elizabeth Cook.Oxford: Oxford UP, 2001.
- . *Selected Letters*. Ed. Robert Gittings. Oxford: Oxford UP, 2002.
- Lehan, Richard. "*The Great Gatsby*" : *The Limits of Wonder*. Boston: Twayne, 1990.
- Malin, Irving. "Absolution: Absolving Lies." Bryer 209-216.
- Mellow, James R. *Invented Lives: F. Scott And Zelda Fitzgerald*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1984.
- Noble, David W. *The End of American History: Democracy, capitalism, and the metaphor of two worlds in Anglo-American historical writing, 1880-1980*. Minneapolis:U of Minnesota P, 1989.

Roberts, Adam. "Keats's 'Attic Shape': 'Ode on a Grecian Urn' and Non-Euclidian Geometry." Bloom 32-35.

Turner, Frederick Jackson. "Contributions of the West to American History." Turner 69-100.

—. "The Significance of the Frontier in American History." Turner 31-60.

—. *Rereading Frederick Jackson Turner: "The Significance of the Frontier in American History" and Other Essays*. Newhaven: Yale UP, 1998.

大井浩二『ホワイト・シティの幻影—シカゴ万国博覧会とアメリカ的想像力—』研究社出版, 1993.

森慎一郎「フィッツジェラルド『偉大なギャツビー』と「正直さ」の問題」『英語青年』2005年4月号, 33-37.

若林幹夫『地図の想像力』講談社, 講談社選書メチエ, 1995.

渡邊眞治「フロンティア理論の再検討」大橋健三郎編『フロンティアの意味』南雲堂, 1993, 229-261.